

「学びの共同体をはぐくむ学校図書館」を考えるミニ・シンポジウム

学びのスペシャリストとしての スクールライブラリアン： 21世紀の学校における協働の重要性

バイオレット・ハラダ
安里 のり子 訳

今日はお疲れのところおいでになって頂き、皆さんとここでお話できることを大変光栄に思います。そしてこのような機会を頂いたことを中村百合子博士に深くお礼を申し上げたいと思います。彼女は私の学生の中でも非常に優秀な学生で、彼女からご招待を頂いたとき、大変うれしく思いお受けしました。私にとっては日本を訪問するのは今回が初めてで、ここにお招きいただいたのは、長年の夢がかなったという感があります。ですから、改めて皆さんがいらしてくださったことにお礼を申し上げます。では、さっそくスライドにそってお話を始めさせて頂いて、最後に質疑応答の時間を持ちたいと思います。

1. はじめに

今日のプレゼンテーションの表題は「学びのスペシャリストとしてのスクールライブラリアン」で、サブタイトルを「21世紀の学校における協働の重要性」としました。中村先生並びにウエルトハイマー先生からご紹介頂いたように、私はハワイ大学からまいりましたが、同僚である安里のり子先生が翻訳と通訳をしてくださいます。

それでは、始めにどうして私たちは現状の変化が必要かについてお話したいと思います。ブランチ先生はただ今お話の中で、探究に基づく授業と学習についてお話していらっしゃいました。私は少し話をもどして、どうして私達は探究に基づいた授業、探究に基づいた作文が必要なのかについてお話し

たいと思います。その理由は一体何なのか。私はこの変化を必要としているコンテキストは非常に重要だと思います。私たちは子供たちが卒業していく時点で、どんな能力を持っていることを想定しているのでしょうか。これは私たちが真剣に問わなければならないことです。そして、その答えは学校のあり方への示唆につながります。学校は子供たちが成功するためには、何をしなければならないのか。私達はこの現状の変化を要求しているコンテキストの中で「学びのスペシャリスト」の役割を定義していかなければならないのです。学校教育を社会状況から切り離しては考えられないということは、今日の学校に必要な変化を考える際に大変重要な点です。今まで行われてきた状況というのは、私達は教室の中だけ、図書館の中だけというような言わば卵のケースの中で教育をしてきたのです。しかし、現在起こっているのは、チームという概念の必要性です。

2. 講演の概要

それではプレゼンテーションの概要ですが、まずなぜライブラリアンが重要な学びのスペシャリストなのか、そしてどのように子供たちの学習のギャップをうめる手助けをすることができるのかについてお話します。つまりここで考えるべきことは、子供たちにとって何が困難なのか、ライブラリアンは彼らがよりよくなるためにはどのような手助けができるのかです。そして次にハワイのライブラリアンが学びのスペシャリストとして活躍している例を二つほど紹介します。そしてさらに、ブランチ博士が話していらした学校内での学習の環境の重要性ということと、そして今日どのように協働がその概念の重要な部分になっているかについてお話します。そして最後に質疑応答にしたいと思います。

3. 教育の変化を要求するコンテキスト

では、まず変化を要求するコンテキストについてお話します。それはグローバル社会、世界にひろがる社会ということです。私達の生活は仕事でありプライベートライフでありテクノロジーに負っている部分が多々あります。カール・フィッシュはビデオ「あなたは知っていましたか？ (Did You

Know?)」の中で、私達が今日直面している変化について語っています。その中の4つの要素を上げてみると、最初の2つはテクノロジーと今日の社会についてですが、それが私達のものの見方や行動をどう変えていっているかです。テクノロジーの情報は毎年2倍になっています。それは、まさに目を見張るものがあります。グーグルの検索回数は毎月300万回です。考えてみてください。このような状況が子供たちが職業に就こうとする社会にインパクトをあたえているのです。フィッシュは、2010年の職業トップテンは10年前には存在していなかった職業になるだろう、そして現在の学生は38歳までに10から14の職を経験するだろうと言っています。これが何を意味しているかというと、私たちは子供たちを「静止した学習者」—学校で学習した知識は持っているが、それが持ち合わせている総ての知識であるという人たち—にはできないのです。それは子供たちはこの様に非常に早い変化を続け、それに適応し、さらに対応していかなければならない社会に入っていくからです。

4. 21世紀の卒業生が必要なもの

では、これからの卒業生はどのようなスキルが必要なのでしょうか。これからお話するのは、私のアメリカでの35年間のティーチングとリサーチに基づいたものですが、私がここで楽しみにしているのは、日本の文化と学校の状況を、そして皆さんが卒業させる子供たちをどのようにごらんになっているかを学ぶことです。アメリカとカナダでいえば、それがどんな形であろうと、アメリカで掲げている基準はカナダのもと類似していて、それらのテーマは表面に現れていると思われます。

このスライドの最初の2つは通常のスタンドラードです。最初の点は基本的な読み、書き、そして作文のスキルです。二つ目の点は各種の科目に関する知識—文学、歴史、科学、算数、などの知識です。そして、残りの点が21世紀の卒業生のスタンダードです。これらは、今日の卒業生はテクノロジーに堪能で、種々のメディアを使うことができ、インフォメーションを利用し、そして作り出すことができる—これらは今日の社会では非常に大事なスキルです。要するに21世紀の卒業生はクリティカルシンキングができなければな

らないということです。彼らは常に答えを与えられなければやっていけない人であってはならない、彼らは自分で答えを探せる人でなければならない、つまり彼らは問題解決ができなければならないのです。さらに、彼らは学校であれ、職場であれ、家庭であれ、人と共に物ごとをやっていかなければならない機会に囲まれています。ですから、ソーシャルスキルというのは大変重要なわけです。協働で知識を創り上げていく、プロジェクトや与えられた仕事をグループまたはチームでやる、これらは総てソーシャルスキルです。彼らは、さらにお互いに対して道徳的な責任感を持ち、インフォメーションを責任のある市民として利用しなければなりません。つまり、自己管理ができるということです。私達は社会にでて問題解決ができ、そしていろいろな人と協働で仕事ができるジェネレーションを養成したい訳です。

5. 教育のモデルの変化

21世紀の卒業生のスキルと特性が定義されたとすると、それらが学校のありかたへ示唆するところを考えなくてはなりません。今日の教育の専門家は現在の学校教育は19世紀と20世紀のモデルに基づいていて、私達は21世紀のモデルに移行すべきであると言っています。ではどのような変化が必要なのかについて次の二つのスライドでお話します。

最初に、19世紀と20世紀の学校はまだ断片的な学習が念頭にあって、そこでは科学、数学、社会、などが切り離されて教えられているわけです。しかしこれは叙々にもっと統合された概念の構成に向かうよう努力されています。先程、ブランチ先生がお話になっていたプロジェクトベースの学習と探究学習は、この統合された概念知識への動きです。メモリーゼーションやドリルやエクササイズが中心のクラスがカリキュラムの中にある一方、単なる繰り返し学習をこえ、生徒が疑問をもつことから始まるクリティカルシンキングを強調していかなければなりません。そこで重要なのは、ただ単に総ての課題に教科書が使われるのではなく、生徒は図書館や、コミュニティー、そして世界中のいろいろなリソースにアクセスを持つべきなのです。一人でやっていける生徒を育てるというのは、教育が目指す素晴らしい一面である一方、私たちは生徒が協働が必要なチームやグループでもやれるようになってほ

しい訳です。そこでは彼らはお互いの得意分野や知識を持ち寄り、彼らの内の誰もが一人で作るものよりも、ずっとすばらしいものができあがるのです。

先生は常に生徒のパフォーマンスを評価しています。しかし、21世紀の学校では、生徒が自分は何をしているのかということを見つめ、自己評価 (assessment) をします。つまり、自分で進歩の状態をみきわめ、どの位うまくいっているのか、どこをよくすべきなのかを判断するのです。自己評価はブランチ先生の探究学習の中でも大変重要な位置をしめています。

ここで強調したいのは、私は教科書のすべての重要な部分を深く探究学習していくというような広範囲のことを言っているではありません。どうかかしてうまくこの深さと広さのバランス点を見つけることはできないのでしょうか。これが私たちが直面しているテンションとチャレンジなのです。

多くの20世紀の教室がテクノロジーに制限があった状態から、私達は今テクノロジーが浸透している教室、図書館、学校のコンピュータラボというような環境へと移行しています。そこでは、生徒はソーシャルネットワークをしたり、インフォメーションを得て、知識の構成をしています。これが私たちが達成しようと努力している21世紀の学校です。

最後に、重要な点は、先生は単にインフォメーションのプロバイダーではなく、インフォメーションへ生徒を導くことであり、そこへたどり着くことを容易にする役目をする事です。もちろん、先生はクラスの前立って授業をすることもあります。それは私達みんなしますよね。でも、それに加えて、カリキュラムの中に、インタラクションの時間を持ちたいと思うのです。そうすれば、私達は何かをしようとする子どもたちのそばにいて、一緒にやることができるのです。21世紀の学校では、私達はこのバランスを上手にとろうとしているのです。

6. 学びのスペシャリストとしてのライブラリアン

今までお話したことが、私たちが21世紀の学校に期待していることだとして、次はその中で学びのスペシャリストの役割をお話しましょう。アリソン・ズムダと私は『学びのスペシャリストとしてのライブラリアン (*Librarians as Learning Specialists*)』という本を書きました。この中で私達は「学び

のスペシャリスト」という概念を紹介しているのですが、それというのは、学校の中で、少なくともアメリカでは、通常のように担当のクラスを持っていない人たちがいて、でも彼らは実際教えていて、生徒や先生と一緒に仕事をしているし、さらに彼らは教員に匹敵するような資格も持っているのです。

次にご紹介するような例が、学びのスペシャリストのアメリカの学校での仕事です。テクノロジーリソース・コーディネイターは学校のコンピュータラボの担当の先生（学びのスペシャリスト）です。通常のクラス担当の先生は生徒をラボに連れてきて、このコンピュータラボの先生が教えます。読みのコーチ（reading coaches）と算数のチューター（math tutors）は、読みや算数に問題がある生徒を助けます。小学校ではよくサイエンスリソース・ティチャーがいて、それは多くの小学校の教員は、理科を教えるトレーニングを受けていないからです。一人の先生が理科を教えた経験があれば、この先生は担当のクラスを持つ仕事からはずされ、その代わりにいろいろなクラスに行ってサイエンスのプロジェクトやレッスンをします。そして、最後はスクールライブラリアンで、彼らは学校全体を扱います。これらの人々が総て「学びのスペシャリスト」ということです。

ここで、学びのスペシャリストと先生の協働という概念は非常に重要です。この学びのスペシャリストと先生のティーチングチームは、教室や図書館で何を達成したいのかという目標を一緒に定めます。そして彼らは生徒がこれらの目標を達成できたかどうかを協同評価や査定（assessment）できる方法を検討します。重要な点は彼らはティーチングのユニットやプロジェクトを協同で計画することです。彼らは、タイムラインを設定し、いつ誰が何を、そして誰がどの部分のティーチングをするのかを決めるのです。これらの活動が始まった時点で、協働のティーチングが起こっているのです。

では、どうしてスクールライブラリアンが、重要な学びのスペシャリストなのでしょう。アメリカやその他で行われた研究によると、子どもたちはある部分ではコンピュータを使う能力はあるが、必ずしもインフォメーションに関しての能力が備わっているという訳ではないという圧倒的な結果が得られています。彼らはインフォメーションがどのように組織立てられているのかという知識をほとんどもっていないのです。ある高校生は百科事典のような

基礎的な資料でさえインフォメーションをどのように調べるのかということ
を学んでいないのです。多くの生徒にとってインフォメーションサーチは非
常に難しく、それはキーワードという概念をよく理解していないからです。
彼らはその科目、例えば科学や数学の語彙を十分もっていないのです。ちよ
うど二、三分前にランチ先生が15歳の生徒にリサーチをするための基礎と
なるインフォメーションを理解させるのに80分かかったという話を思い出し
ました。もし彼らがそのような基本的なインフォメーションを持っていなかっ
たら、必要なキーワードを思いつくことは、さぞかし大変なことだろうと思
います。

生徒たちはおうおうにして、サーチの際に適切な問いというものを作れない
のです—それは彼らが何を知りたいのかとか何をしたいのかという問いで
す。それに加えて、彼らがグーグルサーチをすると、項目を1,000個も引き
出してしまうので、一番適当である答えを選び出すことに非常な困難が生じ
てしまうのです。どれが一番いい答えなんだろう？彼らはそれをどうやって
選び出すのか分からないのです。これらがすべて子どもたちの学習のギャッ
プな訳です。

私はスクールライブラリアンは生徒のこれらの学習のギャップを乗り越え
る手助けができる優秀な適任者だと思っています。ハワイでは、スクールラ
イブラリアンはその資格を得るためには、図書館情報学の修士を修得しなけ
ればなりません。そして、さらに教員養成課程を終了させなければならない
のです。これらの課程で彼らはインフォメーションの検索スキルを身につけ
るのです。また彼らは知識の組織化 (knowledge organization) と情報管
理 (information management) のトレーニングもされ、インフォメーシ
ョンの利用とインフォメーションテクノロジーに対応できるようになります。
そして、彼らが学校に就職をした場合、総てのカリキュラムに精通している
ことが期待され、先生が何を達成しようとしているのか知っていなければな
りません。このトレーニングのおかげで、スクールライブラリアンは先生た
ちと一緒に、子どもたちのインフォメーション能力を延ばす手助けができる
のです。

7. 先生とライブラリアンの協働の例

では、ハワイの先生とライブラリアンの協働の例を二つ程紹介しましょう。最初はワイケレ小学校の昆虫学習の例です。幼稚園の生徒たち（5歳）が校庭でめずらしい昆虫を発見して興奮していました。彼らは先生にその昆虫をビンの中に入れて教室に持って来てもらい、子どもたちはみんな知りたいことだらけです。「これ、なに?」「あぶない?」「これにかまれたら死ぬ?」先生はすぐにこの昆虫の発見と、今行っているクラスの科学のスタンダードを結びつけ、名乗り出た三人の生徒でリサーチチームを編成しました。彼らは自分たちを「昆虫探偵団」と名付けたのです。そして先生はライブラリアンを巻き込んで、この三人の生徒とリサーチをしようと図書館に行きました。

彼らは図書館ではこの昆虫について何一つインフォメーションを得ることはできませんでした。そこでライブラリアンは「ハワイ大学の昆虫学者に電子メールを書くのを手伝ってあげましょう」と申しでて、彼らはメッセージとともにこの昆虫の写真を送りました。次の日、この昆虫学者からの返事で「答えが分かったよ。この昆虫は“サシガメ”と言うんだ。」子どもたちはとても興奮して、この昆虫についてのインフォメーションをもっと集めたいと思い、ライブラリアンの助けをかりて今度はその地域からインフォメーションを集めたんです。

インフォメーションの収集が終わるまでには、子どもたちは自分たちの発見をクラスメートに知らせるだけでは満足できず、学校全体に知らせたいと思ったのです。そこでライブラリアンと先生は子どもたちと一緒に、ビデオコーディネーターの力を借りて、一分のビデオを作りました。このビデオは学校放送で流され、その年は一年中、生徒をはじめ、先生、清掃の人たち、校長、副校長を含めた学校のみなが昆虫を探すようになったのです。これがライブラリアンが学びのスペシャリストとして仕事をし、先生や生徒たちの身じかにいながら彼らが必要なインフォメーションの入手の手伝いをし、自分たちの知識を積み上げていくということです。

二つ目の例は、2,300人もの生徒がいるカポレイハイスクールという大きな高校の話です。この高校では、すべての生徒があるアカデミー（注釈：これは高校レベルの専門と考えていいでしょう）に所属しなければなりません。

このアカデミーの中には、例えば、サイエンス・アカデミー、グラフィックアート・アカデミーなどがあります。サイエンス・アカデミーでは、生徒が生活または物理のテーマでプロジェクトをすることになっています。ここでは何人かのサイエンス・アカデミーの教師が生徒と一緒に、カリキュラムのスタンダードに合うトピックを選びます。トピックは面白く、生徒にとって適切なものでなければなりません。ここで教師は学校の二人のライブラリアンと協働して仕事をします。このライブラリアンは生徒を助けて、地域のインフォメーションのリソース、例えば研究者、医者、栄養士、他の専門家などに連絡をつけることを手伝うのです。このライブラリアンは二人とも、とても尊敬されているカポレイハイスクールのティチャー・パートナーです。このスライドの写真では、その内の一人が生徒たちにノートの取り方のスキルを教えているのがご覧いただけます。また、ここでは生徒たちはインターネットでどのようにインフォメーションを得るのかについて習っています。そして、ライブラリアンはどのようにノートをまとめるのかについても教えます。そうすれば、後で生徒はこの入手したインフォメーションをプロジェクトにうまく使うことができますから。多くの生徒はこのクラスでこのスライドにあるようなディスプレイボードを作成しました。このスライドの女生徒はサーファーで、彼女のリサーチプロジェクトはサーフボードのワックスについてでした。ライブラリアンは、ディスプレイボードが完成し、正確で、見た目にもすばらしいものになるように、生徒がお互いに評価するのを手伝いました。そして、最後に、すべてのプロジェクトが学校の図書館に並べられ、一般の観覧ができるようにしました。

これが、もう一つのライブラリアンの学びのスペシャリストとしての仕事の例です。彼らはプロジェクトの本当に最初の段階から先生と仕事をし、生徒のインフォメーションの収集を手伝い、それを組織立てて整理し、評価し、最終的にプロジェクトを作り上げる手伝いをするのです。

8. 協働のカルチャーを作り上げる

私がここで説明しようとしていることは「協働のカルチャー」を育てることの重要性です。これは生徒と関わり合うすべての人々、それに生徒たち自

身がふくまれます。学校のカルチャーというのは、とても複雑な有形、無形なものから成り立っていて、その中でやっていくには、共通のビジョンが必要とされます。共通の信じるものが必要なのです。それは、目標においた結果を達成するために、協働して日々の訓練をパーフェクトにすることができると信じるが必要とされるのです。学びのスペシャリストはこの協働のコミュニティーのリーダーであり、重要なチームメンバーなのです。カボレイハイスクールでは、このライブラリアンたちがリーダーなのです。かれらは、実際に先生と一緒にスタディーグループの面倒をみています。

協働のカルチャーの中では、メンバーは常に学習のゴールをもっています。彼らは「このカリキュラムは自分たちが目標とする結果を生むのか？」と問うのです。カリキュラムは、学校区なり地域なり国なりの基準となるスタンダードと結びついていなければなりません。重要なのは、彼らは自分自身を中心にしているのではなく、生徒や生徒の作り上げるものやパフォーマンスに中心をおいて、生徒が学習のゴールを達成できる方法に焦点をおいているのです。成功はこのインストラクションのコミュニティーの一人一人のメンバーの専門的知識から導かれるのです。彼らは質のよいインストラクションのために、相互に関わり合いプランを立て、考察、改善、行動、反省、そしてさらなる改善という循環をくりかえします。これはエクセレンスに到達する螺旋状の行程です。

ここで、学校でこのようなカルチャーができあがるためには、管理者側の強い援助が必要であることをお話しておかなければなりません。それには情報交換やミーティング、検討、計画を立てるのに必要な時間を与えてくれる管理者が必要です。そしてさらにメンバーがあるトレーニングが必要であれば、それを受ける機会を与えてくれる管理者がいるのです。管理者は適切なリソースとスペースを与え、そして、フィードバックとレポートを義務づけるべきです。管理者は必ずしもこれらのミーティングには参加しないかもしれませんが、進行状況を把握しておいて、アチーブメントに対して評価を与えるべきです。

9. おわりに

今日の卒業生は学んだということだけでは十分ではないのです。彼らは生涯学習者となる準備ができていなければならないのです。世界が先程お話ししたように非常に速い速度で変化し続けているとすると、子どもたちは自分で考え、変化が必要である際に、的確な変化をもたらす必要があります。彼らは、従来の教育が重視するところの内容や、知識を理解し、評価できる能力をもつことは重要なことですが、彼らは同時に未来を作り上げる人たちでなければならないのです。彼らは新しい知識を作り出していく人々なのです。それが私たちが彼らに準備させるべきことなのです。子どもたちの成功の手助けをするために、先生はもう孤立状態にいるわけにはいかないのです。21世紀の学校では、私たちは協同で、そして協働により子どもたちを援助していくのです。

ご静聴ありがとうございました。

(ばいおれっと はらだ。ハワイ大学マノア校情報・コンピュータ科学部図書館情報学プログラム教授)

(あさと のりこ。ハワイ大学マノア校情報・コンピュータ科学部図書館情報学プログラム准教授)

(テープおこし：ばめら りゃん。同志社大学日本語・日本文化教育センター特別留学生)